

第6回西方音楽祭 2021年春

● 3月27日(土) オープニングコンサート

宇都宮短期大学音楽科学生3名 綱川爽良 (ピアノ・ソロ)、佐藤美華瑠 (フルート)、佐藤愛雅 (チェロ) によるコンサート。ピアノ伴奏は先生の益子徹氏。若い方の演奏は、清々しく、伸びやかで、聴いていて心が洗われるようで、大変好評でした。

● 3月28日(日) リレーコンサート

～ニューヨークスタインウェイB、フレミッシュモデルチェンバロ、ワルターモデルフォルテピアノ、小型パイプオルガンを弾いてみよう!～

小学生から年配の方まで、幅広い年齢層の方に、日頃の腕をご披露いただきました。息子さんのピアノ伴奏でヴィオラを演奏した方もいらっしゃいます。一つ残念だったのは、使用された楽器はニューヨークスタインウェイBのみだったこと。ぜひ来年は、チェンバロ、フォルテピアノ、パイプオルガンにも挑戦して欲しいです。

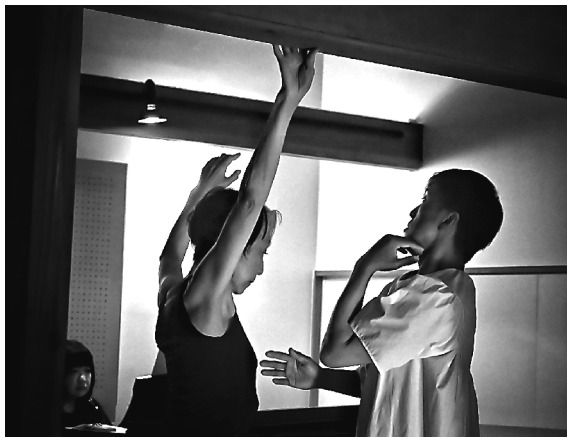
● 4月3日(土) お花見わらべうた わらべうたと演奏: 中新井紀子

0歳児から小学校高学年の子まで、親子&兄弟姉妹で、春のわらべうたを楽しみ、春に因んだチェンバロ、フォルテピアノ、オカリナの音楽を聴き、桜の絵本や桜の詩を楽しみ、お土産にはきれいな「金平糖」(なのでピアノ曲だけ「金平糖」)を。

● 4月11日(日) 「音と身体～その拓かれた空間～」

ピアノ: 蛭多令子 ダンス: 妻木律子 山田哲也(西村朗「夜光」のみ)

2021年4月11日(日)「音と身体～その拓かれた空間～ピアノによる現代音楽とモダンダンス」にて、拙作ピアノ小品8曲が蛭多令子氏により演奏されました。埼玉大学教授である蛭多先生には、いつも同業職能団体(日本教育大学協会全国音楽部門)でお世話になっていますが、じつは学生時代以来もう30年以上の旧知の仲。かつてこの現代音楽のスペシャリストの弾くベルク《ピアノ・ソナタ》やメシアン《幼子イエスに注ぐ20の眼差し》を聴いたのと同じ感動をもってこのたびは拙作を耳にすることができました。スペインのギター音楽を模して作曲した《畑のパエリア》の内包する揺らぎを、古風な旋法と現代風和声のメランジェ《晩秋》の不安定な心理を、ネガティブな《行進曲》のアイロニーを、鋭い洞察で見事に演奏表現されたのには、息を呑む思いでした。また、《ウィーン之夜》のイントロで2拍目を絶妙に溜める弾き方(生きたワルツのリズム)に目から鱗が落ちた次第。蛭多さんは高校生の頃に月に1度来阪する作曲家・矢代秋雄氏の音楽分析の講義を(今は無きあの心斎橋のヤマハで)受けておられた。そんなことも同じ音楽言語で会話できる所以なのでしょう。ともに舞台上に乗った田中カレン、吉松隆、ジョン・ケージ、西村朗各作品と、妻木律子、山田哲也両氏の現代舞踊の一体化された空間も、じつに見事なものでした。【会員・運営委員・作曲家: 木下 大輔】



ダンスの妻木律子さんは、私(中新井)とは幼稚園から高校まで一緒、という長すぎるくらいのお付き合いですが、十数年前同タイトル「音と身体」で改装前の蔵と母屋リビングで、同じお2人に公演していただいた時は、現代音楽のピアノに合わせて、動く彫刻のような不思議なダンスに魅せられました。この度は、更に進化し、ピアノから時に美しく、時に激しく、時に怪しく、時に子供の様に無邪気に発せられる音の意味を、身体の奥深く取り込んで、一層しなやかに、一層微に入り細に入り、木洩れ陽ホールに解き放ちました。西村朗の「夜光」だけに登場した山田哲也さんの存在感が強烈で、漆黒の闇の静けさを縫うように光る美しい音のきらめきの中で、2人の身体が微妙に重なりまた離れ、劇的な最後を飾りました。

抽象的な現代音楽は、なかなか聴きにくいものですが、感性の鋭い妻木律子さんのダンスにはびったりはまり、ピアノとダンスの相乗効果で、一層聴きごたえ、観ごたえのある公演となりました。【西方音楽館友の会会長: 中新井 紀子】

● 4月17日(土) 武田忠善クラリネットリサイタル ピアノ: 久元祐子

クラリネットの武田忠善先生、ピアノの久元祐子先生による演奏会。そう聞いただけで、どんなに良質な音楽が聴けるだろう、と期待に胸が高鳴るところだが、目の当たりにした演奏は本当に素晴らしかった。音質・音量を、またどんな高度な技巧をも自在に操り、作品の持つ世界を開いて見せてくださった。

親しみやすいメロディのうちに人生の良いときを思い出すような、カユザックの「カンティレナ」。水の精の幻想、水辺の光と影、香り、温度や湿度といった感触までもが感じられたドビュッシーの「第一狂詩曲」。心に痛手を負い、木枯らしの中を歩くようなモーツァルトのイ短調ソナタ。夏の雲のようにイマジネーションが湧き立つ、シューマンの「幻想小曲集」。

特筆したいのは、(戦後70年を記憶に刻むことを目的)に作曲された、木下大輔先生の「晴れた日の記憶」である。冒頭、クラリネットのpppからfffまで一息のロングトーン。遠くからかすかな音が聞こえる…とされているうちに、いつの間にか何かが目前に迫っているような感覚。何か、とは戦争の不吉な影だろうか。どこへ向かうのかと不安を掻き立てる、クラリネットの上昇する音型。続くピアノの和音一つ一つが深く胸に刺さる。見慣れていた日常が、ある日を境に少しずつ逸脱していくような、あらゆる方向へ変貌していくのを止められないというような…そのようなインパクトを含んで進行する。地鳴りのように低いピアノが拍を刻み、軍靴の音、軍隊のラッパの音、爆撃の音等を緊密に緊密に折り込んで、徐々に高音域の任へ至る、絶大な緊迫感。狂気すら感じるほどだが、同時に、聴いている私に理性的な視点を保つことを促すようでもある。しかし、有無をいわさぬ非情さで、生活が戦争に覆いつくされていったことを感じずにいられない。

冒頭のクラリネットの上昇する音型は、曲中何度も、ピアノとも掛け合いながら繰り返される。はじめのうち、時代の不安な気配のように感じられていたこの音型が、しだいに「どうして? どうしてこうなってしまったの?」という人間の痛切な肉声として聞こえてきて仕方なくなってしまう。

1945年8月15日のよく晴れた日に、太平洋戦争は集結を迎えた。夏のじりじりと暑い、白抜きするような強い日差しの下に、一つの時代が通り過ぎていくように作品は閉じられる。不可抗力的に個人々々を呑み込んで過ぎていく時代の姿と、その中の人の肉声と一きつとその時代を生きた人と私とは本質的に何も変わらない一、人々を取り巻く空気と(不吉さ、不安さ、また焼けるような夏の昼の感触まで)、この全てが私の身に迫り、圧倒されたのであった。

先の戦争を思い起こすとき、結果的に「今は平和で良かった」としか思い至り得ない自分がいる。その後ろめたさに、感じることを放棄したくなるのが常であるが、この日の演奏に、即ち作品に触れて、私はただ、自分の内に起きた波立ちを静かに抱えていたいと思う。

【会員: 赤羽根はるか】

アンコールでは、サプライズで、メンデルスゾーン作曲「2つのクラリネットとピアノのための演奏会用小品 第2番」全楽章を、武田忠善師が弟子中新井諒子と、速くてスリリングな音進行のところで、2人の掛け合いも、息をぴったりと合わせ、見事な2重奏を披露し、まさかの師弟共演が実現しました!!! 【中新井 紀子】



● 4月18日(日) シェークスピアの旋律 (メロディー)

ソプラノ: 広瀬奈緒 リコーダー: 水内謙一 チェンバロ: 村上暁美 ヴィオラ・ダ・ガンバ: 田中孝子

賑やかな小鳥の歌声が木洩れ陽ホールいっぱい響いて演奏会が始まりました。森の中の音楽会に招待されたような、不思議な感覚です。リコーダーの水内謙一さんの「シェイクスピアに音楽があつたことをご存じのかたはあまりいらっしゃらないと思うのですが…」とのお話に、予備知識なしで来て、場違いだと思いながら座っていた私の緊張が一気にほぐれました。

リコーダーはとても温かみのある音色。ヴィオラ・ダ・ガンバの田中孝子さんとチェンバロの村上暁美さんはメロディーを支えつつ、時折現れる主役パートでの演奏の凄さに、目を大きく開けて見入ってしまいました。

ソプラノの広瀬奈緒さんは、深く、優しく歌う方でリコーダーの音色に合ったお声の持ち主でした。どれも古い時代の英語の歌なのに、ただただ心地いい。国も時代も超えた、大衆に継がれた歌の普遍性を実感しました。

次々と演奏される楽曲に引き込まれ、当時のイギリスの小さな町の教会にいるのではないかと錯覚してしまいました。ですが、お別れの時間は近づき、太鼓と笛を鳴らしながら4人は退場。帰り道でも魔法は解けず、強い風になびく青々とした麦を見ながらハンドルを握る自分が、馬車の手綱を握っているかのような気分でした。

この時間と空間を木洩れ陽ホールごと包んで取っておきたいくらい、心に残る演奏会でした。ありがとうございました。【会員: 青山 絵理】



● 4月24日(土) 古楽コンクール<山梨>入賞記念コンサート

バロックヴァイオリン: 出口実祈 チェンバロ: 中川岳

花ざかりの館で



中川さんと出口さん

2021年4月24日、第6回西方音楽祭「国際古楽コンクール(山梨)入賞記念コンサート」を聞いた。出演はバロックヴァイオリン出口実祈(みのり)、チェンバロ中川岳。出口さんは2019年、中川さんは2014年の同コンクール入賞者だ。プログラムは、「バロック時代のドイツとフランスの作品を集めて」と題され、お二人の演奏とそれぞれの独奏が盛り込まれた。多彩な曲目、素晴らしい演奏、花ざかりの館で満ち足りた時を過ごす喜びに包まれた。

驚いたのは、午後の部に谷戸基岩先生ご夫妻がおいでだったことだ。先生は、年間240回を超えるコンサートに通い、雑誌等への執筆、「知られざる作品を広める会」の主宰といった気骨ある活動を続けておられる専門家だ。この演奏会は、邦人アーティストや優れた才能の発掘にもこだわる先生のお眼鏡に通ったことになる。(ご招待申し上げてはいない)

中新井館長は、2021.4.27付の自身のフェイスブックで「実力者!・・魅力的!・・といった、常套の形容詞を超えて、音楽の核心に迫る、音楽そのものの面白さを開示」と述べたが、私も「ヴァイオリン、次はどんな音だろう」、「チェンバロがここで浮かび上がるか」と、「名人の囁きを聞くような、期待と、それを上回る満足とを感じながら聞き進めた。

谷戸先生は「間がいい。クリストフ・ルセ(フランスのチェンバロ奏者、指揮者)もいいが、あんなにくだくなくのがさらにいい」とおっしゃっておられた。

この音楽館、音楽祭、種々の演奏会は、この地域の花だろう。咲き続けることができるよう、地元の皆で、施肥し、水を撒き、花の館を守っていききたいものだ。

【会員・運営委員・医療法人寿朋会 理事長: 高田 良久】



音楽館の庭